

研究テーマ	制作における充実感・達成感を味わわせる指導の在り方 ー中学 3 年「想像画 私と私の世界」の実践を通してー
-------	--

坂東市立岩井中学校 教諭 野田 智希

I 研究テーマについて

中学生になると、美術に対して苦手意識をもつ生徒は少なくない。生徒の美術に対する意識として、「得意な人は頑張らなくても上手く描くことができ、よいアイデアもすぐに出るものである」や、「苦手な人は頑張っても上手く描けない」、「そもそも、描きたいものや、作りたいものがない」というものがある。生徒は自分の限界を最初に設け、それぞれのレベルで、それなりの作品を作れば良いというあきらめにも似た態度が見られる。その結果、ただだらと時間だけを使い、とりあえず形に仕上げただけの作品になってしまう。そのような制作には、喜びや感動といったものは全くない。しかし、制作上の苦しみに負けず真剣に作品に向き合えば、そこには様々な発見や喜びが待っている。喜びや感動を得ることが実感できれば、より真剣に美術に向き合い、さらなる達成感や・充実感を得ることができるとは思われる。また、限られた時間内に作品の完成度を十分に上げ、生徒たちに「できた」、「やりきった」と感じさせることも重要であると考えられる。

美術における意欲や、課題のレベルは様々であるが、一人一人が充実感・達成感を十分に味わえるような授業を行っていきたいと考え、この研究テーマを設定した。

II 研究の実際

1 題材名 「想像画 私と私の世界」

2 題材の目標

- (1) 心に残ったイメージや、想い、身近なものにも関心を持ち、積極的に作品に表現しようとする。
(関心・意欲・態度)
- (2) スケッチを通して構想を徐々に明確にし、一つの作品として表現することができる。
(発想・構想の能力)
- (3) 描画材の工夫を通して、造形的な表現力を身につけることができる。(創造的な技能)
- (4) 作品を展示、鑑賞し、表現方法の工夫やよさを感じ取り、お互いに伝え合うことができる。
(鑑賞)

3 題材について

(1) 生徒の実態

(男子 18 名 女子 12 名 計 30 名 9 月 27 日実施)

○絵画制作の際、苦勞することはなんですか？（複数回答可）

- | | |
|-------------------------|-----|
| ① 描こうとするもののアイデアが浮かばない | 77% |
| ② 描こうとするもののかたちがうまく描けない | 65% |
| ③ 画面をどのように構成すればよいかわからない | 35% |
| ④ どのような色を塗ればよいかわからない | 35% |
| ⑤ その他 | 10% |

この調査から、生徒が、「描こうとするもののかたちがうまく描けない」以上に、まず、「描こうとするもののアイデアが浮かばない」ということが、絵画制作においてもっとも苦勞する点だということが分かった。確かに実際に制作を始めると、どのように発想し、構想していけばよいかわからず、まったく描くことのできない生徒も少なくない。

(2) 題材観

この題材は身近なものや大切なもののスケッチを複数素材にする。私たちは自分の身の回り

にあるものに対して、特に興味を持って観察することはあまりしない。しかし、意識してよく観察してみると、今まで気づかなかったことや、新しい発見が数多くある。作品として描くには物足りないと思っていたものが、実は魅力的であると気付くこともある。そして複数のモチーフを画面の中で組み合わせることで、今までにはなかった新しい世界を生み出すことができる。画面の中でいろいろなかたちがひしめきあい、そのものに見えることもあれば、全く新しい形がみえてくることもある。何が描かれているのか探し出したり、予想したり、形自体を楽しんだり、そういった面白さを発見することができる。

(3) 指導観

本題材は、はじめから完成を予想して制作させるのではなく、数多くのスケッチを通して、とにかく手を動かし、そこから表出されるものとのやり取りを通してイメージが触発され、次第に明確になっていく発想と構想の過程を経験させたい。またモチーフが本来もっていた魅力を発見し、それに手を加えることで新しい魅力を加える。そして、それを味わうことができる能力身につけさせたいと考える。

4 題材の評価基準

関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
身の回りの様々な対象から感じ取ったこと、考えたことなどを表現することに関心を持ち、主体的に主題を生みだそうとしている。	主題などを基に創造力を働かせ、形や色彩の効果を生かして単純化や省略、強調、モチーフの組み合わせなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かな表現の構想を練っている。	材料や用具の特性を生かし、表したいイメージをもちながら自分の表現意図に合う新たな表現方法を工夫するなどして、創造的に表現している。	形や色彩などの特徴かや印象などから全体の感じ、本質的な良さや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などを感じ取り、自分の価値意識をもって味わっている。

5 指導と評価の計画(13時間扱い)

時間	学習内容・活動	評価基準・【評価方法】
第1次 ③	○導入 題材イメージについて確認し、制作の見通しをもつ。 ・参考作品を鑑賞する。 ・題材の流れを確認する。 ○身の回りの様々なものをスケッチする ・一筆描きスケッチ大会を行う。 ・教科書の中からモチーフを探しスケッチする。 ・大切なもの・お世話になっている道具などをスケッチする。	・身の回りのものに関心を持ち、積極的にスケッチすることができる。 関・創【観察・ワークシート】
第2次 ③	○下描き スケッチを組み合わせ、ユニークな世界を表現する。 ・材料を組み合わせユニークな世界を表現する。 ・下描きにペン入れをする。	・形や色彩の効果を生かして単純化や省略、強調、モチーフの組み合わせなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かな表現の構想を練ることができる。 関・発【観察・作品】 ・下描きの線をもとに、生き生きとした線を引くことができる。 関・創【観察・作品】

第3次 ⑥	○着色 ・全体を大まかに、自由に塗り分ける。 ・色を重ねて、立体感、質感、密度を出す。	・材料や用具の特性を生かし、表したいイメージをもちながら自分の表現意図に合う新たな表現方法を工夫するなどして、創造的に表現している。 創【観察・作品】
第4次 ①	鑑賞 ・友達の作品を鑑賞し、作品の魅力を伝え合う。	・形や色彩などの特徴や印象などから全体の感じ、本質的な美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などを感じ取り、自分の価値意識をもって味わっている。 鑑【観察・ワークシート】

6 指導の実際

(1) 制作の中に驚きや、新しい発見の感動を味わうことのできる題材を設定する。

題材「私と私の世界」(想像画)

生徒にとって絵画制作においてもっとも苦勞する点は、「描こうとするもののかたちがうまく描けない」以上に、「描こうとするもののアイデアが浮かばない」ということがアンケートからわかった。このことから、発想や構想が充実したものになれば、最後まで意欲的に作品の制作を行うことができるはずである。

この題材では、幻想の世界のようなまったく現実味のない想像画の制作をするのではなく、自分の身の回りにあるものをモチーフとし、段階的にアイデアスケッチを行っていく。そして、それらを組み合わせて構成し、ユニークな作品を制作することにした。制作を通して、普段見慣れている身の回りのものを見つめ直し、視点を変えたり、モチーフを組み合わせて表現したりすることで、形や色の変化を発見し、見つめ直すことの大切さや面白さに気付くことができるのではないかと考える。

また、最初に表現したい主題を決めたり、完成のイメージをもって制作したりするのではなく、描いた数多くのスケッチに触発され、次のイメージを描き足し、描いては考え、考えては描くことをくり返し、そこから表出されるものとのやり取りを通して新たなイメージが触発され、次第に明確になっていく発想と構想の過程を経験させる。そこから、自分でも想像しなかったような世界が広がっていくという制作のおもしろさや魅力を感じさせたい。

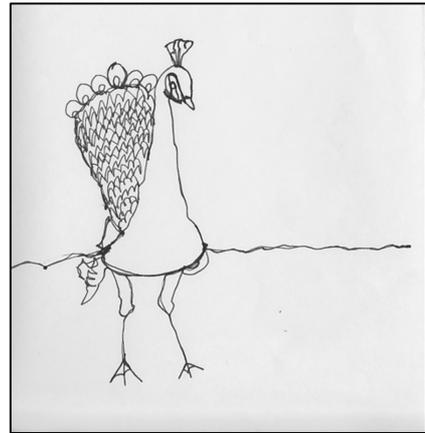
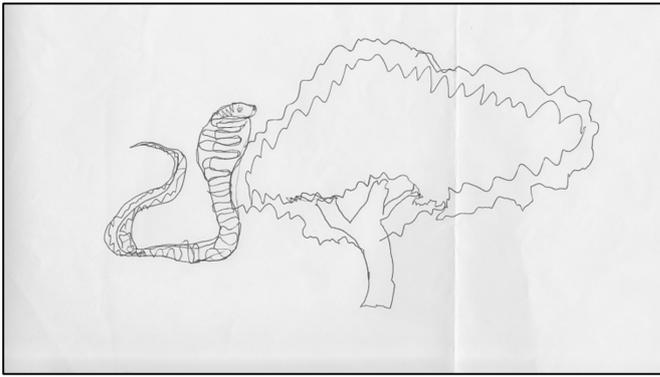
(2) 段階的な指導により、アイデアスケッチを充実させる。

ア 「一筆描きスケッチ大会」

授業の始めに毎回3分間スケッチを行っており、多くの生徒がモチーフを見ながらスケッチすることができる。しかし、うまく描けないという理由で苦手意識をもっている生徒も多い。そこで、「一筆描きスケッチ大会」と題し、様々なモチーフを一筆描きでスケッチするという授業を行った。最初に生徒の前で教師がデモンストレーションをおこなった。生徒のリクエストで、教室内のものや、写真資料の中からモチーフを選び一筆描きした。線の美しさ、勢い、強弱をつけたり、リズムカルに、大げさになど、楽しそうに線を引くことを心掛けた。一筆描きでは、どんなに頑張っても本物のように描くことには限界があるということや、細かな部分が省略されたり、形がデフォルメされたり、本来ならないはずの線が行きかうことで、本物とは違った魅力が加わることを伝えた。実際に制作を行ってみると、モチーフを集中して観察したり、目でモチーフを追ったりしながらペンを進めることで、ユニークな形ができる生徒も多かった。

絵画制作も、実は体を動かすことで線が引けるという身体的な行為である。モチーフを再現するという魅力以外にも、落書きを行っているときのような身体を動かすことの面白さに気づく生徒も多く、楽しそうに活動する生徒が多かった。出来上がったスケッチの中には、消しゴ

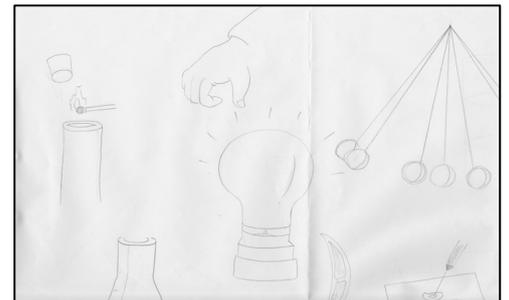
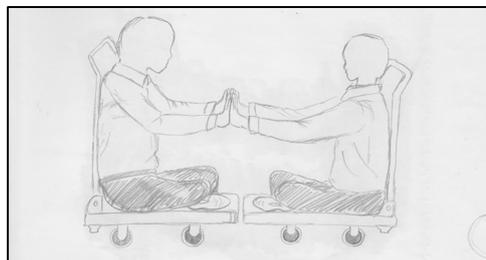
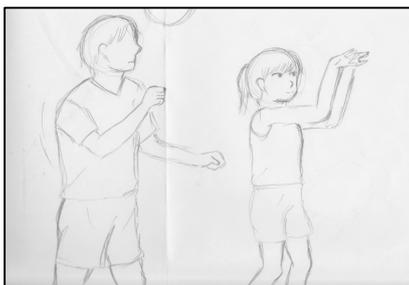
ムを使えないという緊張感のある線や、体の動くままに任せて引いたのびのびとした線など、普段のスケッチとは違った雰囲気が感じられた。



イ 「発見 教科書の中の面白モチーフ」

最初に主題を決めることができれば、それに向かって黙々と制作を進めることができる。しかし、それでは制作する本人にとって完成予想に近い仕上がりになることが多く、主題に沿ってモチーフを選ぶと、ありきたりなモチーフを選んでしまいがちで驚きや面白味が少ない。そもそも、最初から主題を決めることは生徒にとって非常に難しいことである。経験や技術の蓄積の少ない生徒にとって、何かを作り出す場合に最も大切なことは手を動かすことであると考えられる。そして、失敗を恐れずにアウトプットとインプットを繰り返すことが大切である。

想像画の制作には材料が必要であると説明し、材料集めを行うことにした。材料とは、様々なスケッチのことである。生徒には、スケッチを組み合わせることで、ユニークな作品ができることを伝えた。作品を作るための材料のモチーフは、普段、他教科で使用している教科書や、資料集である。特に理科と体育の資料集は魅力的なモチーフが多いと感じた。学習内容をより深めるための説明図や写真をモチーフにすることに生徒は驚いていたが、これらをモチーフにしたスケッチを見せると、生徒もそれらのモチーフに興味をもち、楽しみながら教科書や資料集をめくりモチーフを探す姿が見られた。なかなかモチーフを決められない生徒には、適当に開いたページから探させたり、面白くなりそうなモチーフのアドバイスをを行った。コツがつかめてくると、ワークシートいっぱいスケッチする生徒も多くなった。



- ③ 豊かな発想・構想を生み出す指導を工夫する。「材料を組み合わせるユニークな世界を表現しよう」

これまで描いてきたスケッチを組み合わせ、新たなイメージを作り出す。全く関係ないモチー

フを組み合わされることで、新たな魅力や価値を発見することができる。偶然と偶然が絡み合っ
て物語が生まれるようである。ユニークな作品を作るためには、この過程でいかに試行錯誤する
かが大切である。しかし生徒は、自由に組み合わせて良いと指示されただけでは制作を進められ
ないことが考えられるため、以下のようなポイントを黒板に貼り説明した。

黒板に貼ったポイント		ポイントの効果
1	主役を決める、もしくは大きく描く。	画面が埋まらないという不安がなくなり、次の一筆につながる。
2	生き物を入れる。	作品に物語が生まれる。
3	同じモチーフを繰り返す。	画面にリズムが生まれる。思いがけない模様ができる。
4	モチーフを重ねて描く。	描いてから必要かどうか考え、重なりによる密度を出すと共に、時にはモチーフを融合させユニークな形をつくる。
5	背景はなくてよい。	不自然で、わざとらしい背景になってしまうことを防ぐ。
6	重力は無視する。	重力に縛られ、窮屈な絵になることを防ぐ。

さらに、スケッチをコピー機を用いて拡大・縮小するなどし、材料としてのスケッチを有効に
活用することを指導した。スケッチと画用紙を窓ガラスに貼り付けたり、鉛筆でスケッチの裏を
こするなどし、スケッチをそのまま転写する方法も紹介した。八つ切りの画用紙に徐々にモチー
フが描かれるにつれ、生徒の手を動かすスピードが上がってきた。モチーフとモチーフを組み合
わせることの面白さを感じているようであった。この過程によって、ありきたりな想像画の構成
ではなく、自分で描いたモチーフとの対話によるユニークな構成ができたと感じた。また、作品
に対しての愛着も湧き、最後まで粘り強く取り組む生徒が増えた。

④ 既習の内容を活かした着色

着色は、ポスターカラー、色鉛筆、ネームペン、カラーペン等を混合して使用する。制作の意
図や、時間的な制限によって使用する描画剤を変えることで、より充実した制作につなげたい。
これまでの授業で、1年生では平面構成においてポスターカラーの特徴を活かした平塗りや、色
の基礎知識や配色について学習した。2年生では自画像の制作において、重色による立体感や質
感の表現を学習した。今回の想像画の制作では、今までの学習内容を活かしながら、自分の意図
に沿った技法を用いて着色を行わせたい。着色の際にこれまでの学習内容を振り返ることで、様々
な技法の中から制作意図に合った表現を吟味し、よりよい作品の制作につなげることができた。

⑤ 付箋を用いた相互鑑賞

作品の相互鑑賞では、互いの意見を交換することで自他の良さに気づき、今まで分からなかつ
た自分の個性に気付く機会としたい。そこで、付箋を用いて作品についての感想を交換する鑑賞
活動を行った。また、作品について語り合うことで、イメージや物語が広がることを体験させる
ことができた。制作中は、あえて相談や意見交換をせず自分だけの世界観を大切にすることで、
ひとりひとりの個性が際立つ作品に驚いたり、感動したりする鑑賞会とすることができた。

Ⅲ 研究の成果と課題

1 成果

制作後に、この題材で制作において達成感・充実感を味わったかというアンケートを行った。
「制作を通して達成感・充実感を味わうことができたか」（5段階評価で5が最も良い）

岩井中学校 3学年 57名(平成28年12月調査)

十分味わった・味わった(5・4)	49人	86%
------------------	-----	-----

どちらともいえない(3)	7 人	7 %
あまり味わえなかった・味わえなかった(2・1)	1 人	2 %
合 計	57 人	

このアンケートから、達成感・充実感を味わった、十分味わったと答えた生徒は、86%であった。「達成感・充実感を味わった」、「十分味わった」と答えた生徒以外の生徒も、最後まで粘り強く制作し、今までの作品と比べても完成度の高いものになった。

「発想力」「構成力」は必要不可欠なものであるが、何も無いところからの発想は不可能である。今回の題材では、豊かな発想のための手順と、構成に必要なルールやヒントを示し、「発想力」「構成力」を引き出す訓練ができた。また、順序立てて制作することや、根気強く取り組むことで、誰でもユニークで完成度の高い作品を生み出すことができるという実感を味わわせることができたと考える。

生徒の感想

- ・一筆描きスケッチ大会では、うまく描くことに対する抵抗をなくしたり、うまく描かれていないものを味わったりするといった体験もすることができた。
- ・描くことでアイデアが生まれてくるということを実感できた生徒も多く、アイデアは思いついてから描くものではなく、描くことで生まれてくるということが体験できた。
- ・今回述べた手立て以外にも、ペンや色鉛筆を併用することで作品に厚みや密度を出し、絵具を準備するには少ない時間を有効に利用できた。また、集中して取り組むための環境などにも取り組み、限られた時間内にユニークで完成度の高い作品の仕上がりを目指す工夫を行った。

2 課題

- ・今回は八つ切り画用紙を用い、13時間という時数がかかった。その中で着色は6時間行ったが、途中で飽きてしまう生徒もいた。しかし、作品の大きさをさらに小さくすれば解決するというものではない。長時間の制作に飽きずに、より意欲的に制作に向かうための授業展開や指導を考えていきたい。
- ・既習内容を活かす学習を意図して取り入れることでひとりひとりに成長を実感させ、さらに達成感・充実感を味わわせたい。
- ・生徒同士の意見交換や、互いを認め合う態度の育成、展示の工夫などを行い、自己肯定感を高め、制作に対する意欲の向上を図りたい。
- ・常に既習内容確認できたり、それを制作に生かしたりできるよう、教室の掲示物などを工夫したい。

(参考資料：完成作品)

